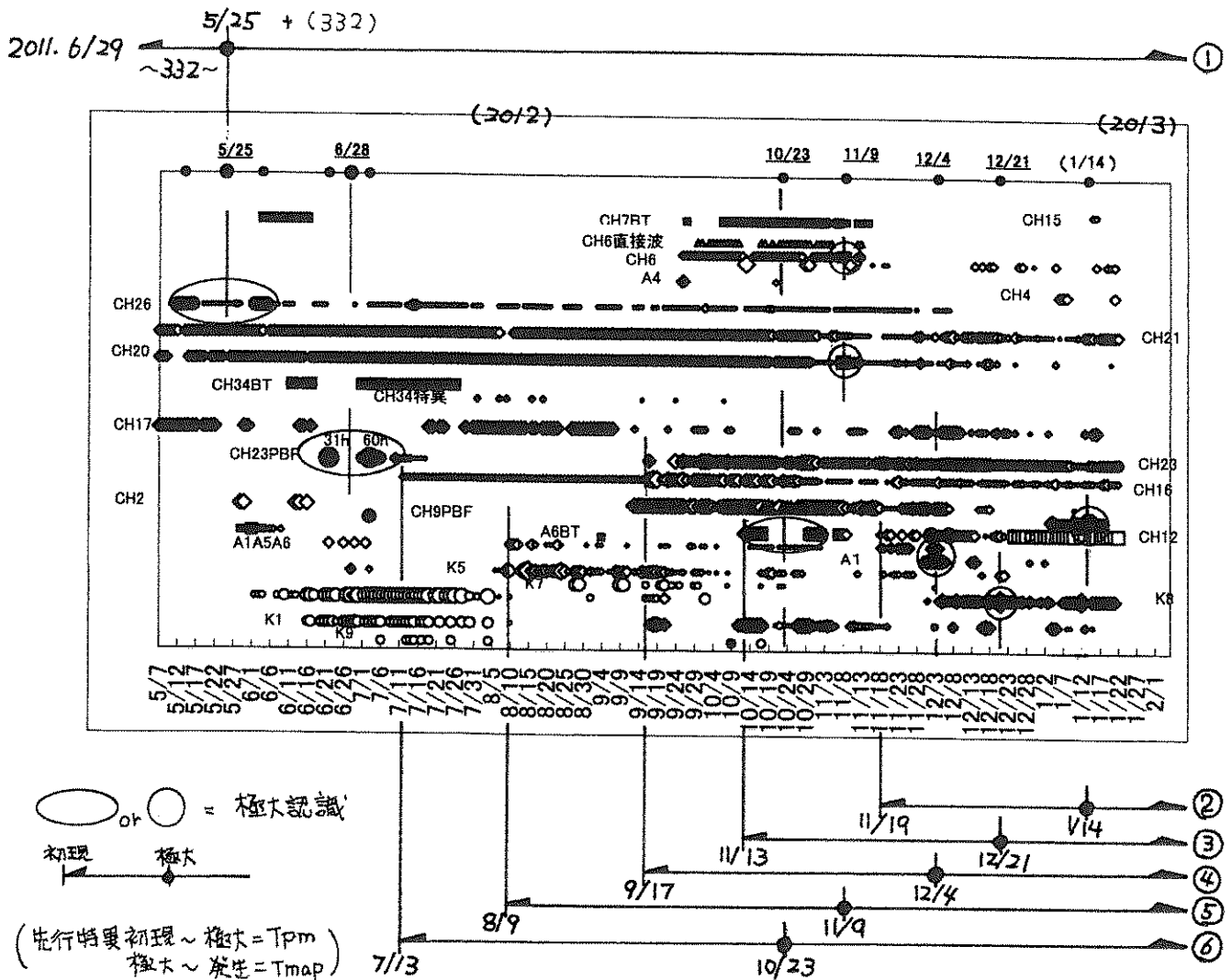


原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 近畿圏地殻大型地震の可能性推定前兆続報 前兆形態再考察



No.1778前兆 2012年05月～現在(2013.1/22) までの前兆出現変化 (第4期前兆群認識)

- ①新機軸 2011.06/29 — 極大 2012.05/25 — Tpm: Tmap=1:1 ⇨ 計算上 Tmap=332±10 Tpp=87±(2/01±) 推定発生日=4/21±10
 - (②) 初現 2012.11/19 — 極大 2013.01/14 — Tmap: Tmap=20:13 ⇨ 計算上 Tmap=104± Tpp=26±(4/02±) ⇨ 推定発生日=4/27±3
 - ③ 初現 2012.10/13 — 極大 2012.12/21 — Tmap: Tmap=20:13 ⇨ 計算上 Tmap=128± Tpp=33±(3/26±) ⇨ 推定発生日=4/27±3
 - ④ 初現 2012.09/17 — 極大 2012.12/04 — Tmap: Tmap=20:13 ⇨ 計算上 Tmap=145± Tpp=37±(3/22±) ⇨ 推定発生日=4/27±3
 - ⑤ 初現 2012.08/09 — 極大 2012.11/09 — Tmap: Tmap=20:13 ⇨ 計算上 Tmap=171± Tpp=43±(3/16±) ⇨ 推定発生日=4/28±3
 - ⑥ 初現 2012.07/13 — 極大 2012.10/23 — Tmap: Tmap=20:13 ⇨ 計算上 Tmap=189± Tpp=48±(3/11±) ⇨ 推定発生日=4/29±3
- ↑ 上図番号 ↑ 初現認識 ↑ 極大認識 ↑ 使用経験則 ↑ () = 計算上前兆終息時期 ↑ 推定発生日

備考

①=先行特異初現～極大: 極大～発生=1:1 (±10日程度誤差有) 使用。
CH16=2011.3～静穏～2011.6/29 ————— 2012.05月中旬(5月極大) ～静穏 2012.7/13 ————— 現在継続中
CH16は上記のとおり、2011.6/29 前は長期間静穏基線。2011.6/29 から2012.05 の極大前まで特異状態継続出現。従って、2012年5月の極大に対する先行特異前兆の可能性と再認識した。
②=確定困難(参考) (解説は次頁参照) C) Copyright 2013 YSO 八ヶ岳南麓天文台

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 近畿圏地殻大型地震の可能性推定前兆続報 前兆形態再考察

PHP新書「地震予報」にも記した 2012.5月極大に対する先行特異初現を誤って認識していた可能性有

No.1778長期継続特殊前兆（近畿圏大型地殻地震の可能性推定前兆）の続報です。前頁の解説です。

No.1778長期継続前兆は、2008年07月より現れだし、継続して、現在までに4段階のステップ状変化をして参りました。2012年05月からは第4期前兆群に突入したと認識されます。

現在までの実験観測情報でも、また2012年11月刊行のPHP新書「地震予報」内にも詳しく書かせて戴きましたが、この第4期前兆群の初めの5月極大に対して、第3期前兆群出現中の長期継続前兆を先行特異の可能性として認識理解致しました。

先行特異とは、前兆極大付近まで先行して継続する特異状態を主とする前兆で、先行特異初現～極大：極大～発生=1:1経験則があります。（但し誤差が大きい）

今まで、2012年05月極大に対する先行特異初現をCH17等の特異状態の可能性と認識していました。その場合、上記経験則からは、2012年12月29日±10時期が計算されることになりました。

しかし、この時期に次ステップに移行する極大や前兆初現等が確認された訳でもなく、本日現在まで前兆は継続出現しております。この事実は、あきらかに先の先行特異初現認識が間違っていたことを示していることとなります。

また、05月の極大を無視して、最近の前兆時間的変化から、極大認識、前兆初現認識を実施し、01月末時期発生の可能性も最近まで考察していました。しかし、その場合でも1/20±時期には前兆終息が認められることが計算されていました。前兆自体は、以前と比較しますと、顕著な特異状態を記録していた、CH16, 21等も正常静穏基線を記録する時間帯も出現し、全体的にも静穏化傾向には見えます。しかし、明確な前兆終息が認められた訳ではありません。このことから、今月末時期発生の可能性も否定されます。

そこで、最近までに実施した認識を全て白紙として、改めて2010年から現在までの前兆を見直し作業を実施致しました。

2012年05月から第4期前兆群に突入したことは確かと再認識されましたが、先行する継続特異は、CH17ではなく、CH16の可能性が浮上しました。CH16は2008年から断続的に特異状態を記録してきましたが、2011年03月から06月末までは完全静穏基線を記録し、前兆はありません。しかし、2011年06月29日～2012年05月中旬までの約11ヶ月間、特異状態が継続出現しています。その後は、07月13日から現在まで特異状態継続出現となっておりますが、この2011年06月29日が、第4期前兆群の2012年5月極大に対する先行特異の可能性があると再認識した次第です。前述先行特異～極大の関係で見ますと、4/21±10時期が計算されることとなります。4/11～4/31期間の可能性有。

次に、2012年5月以降現在までの前兆変化を改めて見て、極大の再認識と、継続前兆の初現の関係を調べなおしました。その結果、再認識された関係が、前頁の図のとおりです。各前兆初現、極大の間隔日数を、 $T_{\text{ap}}:T_{\text{mp}}=20:13$ （前兆初現～発生：極大～発生=20:13）経験則から、前兆初現～極大：極大～発生=7:13の比率で計算しますと、前頁に記したとおり、全てが、4月28日±1時期を示す結果となりました。

この関係が正しいか否かは、前頁に記した、計算上の静穏化時期（ ）内時期に前兆静穏化変化が確認できるか否かで判定できる筈です。現状の再認識理解が正しければ、4月下旬まで発生の可能性は否定出来ることとなります。仮にこの先、突然全ての前兆が終息したとしても、静穏期間がありますので、最低でもその後数週間以内の発生の可能性は否定できますので、仮に終息した場合には、すぐ続報で報告予定です。

PHP新書執筆時期に認識した、先行特異初現の誤認から、早い発生の可能性を考察し、その場合の可能性を重視して、最近の前兆変化を考察していましたが、前述のとおり、発生はまだ先との見解となりましたことを深くお詫び申し上げます。今後の変化を観測し、現認識が正しいか否かを見極めたいと思います。

PHP新書読者の皆様へ

最も早い場合の発生時期考察として、1月末時期の可能性も考えられておりましたが、上報告のとおり、本日現在も前兆は継続しており、明確な前兆終息は認められませんので、明らかに、今までの前兆変化時期認識を間違っていたことが確かです。

1月末発生の可能性は否定され、4月末時期の可能性見解が得られたのは、1月18日で、既にFAXで配信しております実験観測情報では、公開実験参加登録者の皆様へは報告済です。WEB上での続報が遅くなりましたのは、前兆終息変化がその後も無いことを確認していたためです。お許し下さい。

PHP新書執筆当時に認識した、先行特異初現認識が間違っていたことは確かで、小生の認識力の無さを深くお詫び申し上げますと共に、どうかお許し戴ければと思います。

本続報のとおり認識が正しい場合は、2012年5月から第4期前兆群に入り、現在も第4期前兆群継続中であると認識

されることとなります。2008年から現在に至るNo.1778長期前兆全体の中でも、今回の第4期前兆群の様な前兆形態は他に無いことから、現在が最終段階である見解は変わりません。

また、PHP新書「地震予報」執筆後、現在までの期間での観測データに、推定領域=近畿圏（新書内図のとおり、またはと続報No.005掲載図のとおり）領域、推定規模=M7.8±0.5の既に推定しております、推定地震活動内容を修正すべきデータは得られておりません。従いまして、領域の推定、規模の推定は、現状まで一切修正変更はありません。

発生時期推定のみです。前兆変化時期の認識誤認で、早い時期の推定をしておりましたが、これから約3ヵ月間、前兆変化を追いながら、更に解析検討を進め、順次続報でご報告させていただきますので、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

串田嘉男 拝